

首都マニラにある青少年鑑別所。子どもたちは一日中やることもなく、ただ時間が過ぎるのを待つ。

# Republic of the Philippines

EARTH GALLERY Vol.134 [フィリピン共和国]

地球ギャラリー  
写真文・清水匡  
フォトグラファー

# 二つの国の少年少女

社会にとって危険とみなされるストリートチルドレン。  
しかし子ども一人ひとりが社会の犠牲者なのだ。



10歳前後の子どもが収監されていることも多い。  
路上にいるところを捕縛され連れて来られることもある。



子どもたちはギャングに属して自らの身を守る一方で、  
犯罪に巻き込まれていく。



一度収監された子どもに自由はない。



いつも仲間と一緒にいるものの、  
実際は孤独でもある。



物乞いなどで得た稼ぎは  
仲間に盗られる前に消費する。



タトゥーは彼らのアイデンティティ。  
主張や思いなどが込められている。



空腹をまぎらすためにシンナーを出し、  
次第に体や脳が侵されていく。

路上生活は厳しくもあり、自由でもある。



フィリピンの首都マニラにある青少年更生施設「希望の家」は、法を犯した15〜18歳の未成年者が収容される公的施設だ。窓から光が差し込む黄色い壁の部屋は一見明るい雰囲気だが、鉄格子のドアには鍵がかかれ、つねに警備員に監視されている。部屋には30人くらいの子どもたちが収容されている。

私はこの夏、日本から「友情のレポーター」の高橋叶多くん（中学3年、15歳）と伊藤里久さん（高校1年、15歳）を連れてフィリピンを訪れた。「友情のレポーター」とは、NPO法人「国境なき子どもたち（KnK）」が日本在住の11歳から16歳までの子どもたちを公募して海外の子どもたちと交流し取材するプログラムだ。

フィリピンに来て最初の取材がこの「希望の家」、いわゆる鑑別所だ。しかもギャングに属している子どもたちが収容されていると事前に聞かされていた里久さんと叶多くんは表情は不安と緊張で、こわばっている。二人がドアに近づくと、警備員が大きな南京錠を外して部屋の中に通してくれた。二人の緊張とは裏腹に、子どもたちはわれわれを興奮気味に歓迎してくれた。子どもたちが一人ひとり、名前、年齢、ここに来た理由、将来の夢を教えてください。すると叶多くんは、将来の夢を「ファッションデザイナー」と答えた14歳のマイケルくんにもっと話を聞きたいと言いつ出した。

マイケルくんはファッションデザイナーを目指す理由を尋ねた。「友だちがデザイナーを目指して僕も影響されました。父が失業し生活に困ったことがあって、自分も稼げるようになって家族の力になりたいんです」という答えが返ってきた。同年代の少年の切実な事情に叶多くんは驚いていた。続いて「希望の家」に連れてこられた理由を聞く。「信号無視して道路を渡るうとしたら交通整備員（警察とはまた別）に捕まえられて、ここに連れてこられたんです。そしてこう言われました——『この少年が盗みをしたので捕まえて連れてきました』。僕は窃盗容疑でもう3か月もここにいます。僕は盗みなんかしていません！」とマイケルくんは強く訴えた。この取材後にKnKは法的手続きをとってマイケルくんは釈放され、KnKが運営する自立支援施設「若者の家」で保護されることが決まった。

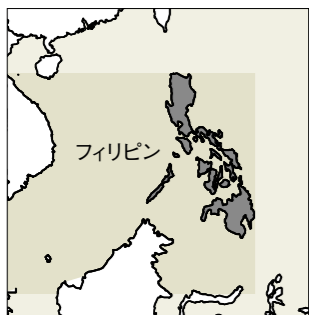
次に里久さんが、収監されてちょうど1年が経つ14歳の少女、キャリーさんに話を聞いた。里久さんは最初、「年の近い女の子同士なので心を聞いてもらえる」と考えていたらしい。しかしここに連れてこられた理由を尋ねると、キャリーさんは「話したくない」と口を閉じてしまった。里久さんはキャリーさんを傷つけたかもしれないという不安で、目を真っ赤にしていた。それでもなんとか将来のことを聞いてみ

ると、キャリーさんは「今までの友達には会わず、ファッションの学校に行って勉強したい」と答えた。なぜ、友達には会わないのだろうか。キャリーさんにとって昔の友達は本当の友達ではないのだという。「ピアプレッシャー」という言葉がある。「ピア」は仲間、「プレッシャー」は圧力。ストリートチルドレンの多くはギャングに属して自分の身を守っている。一方で、この「ピアプレッシャー」により犯罪に手を染めざるを得ないことが少なくないのだ。

取材の翌月、KnKのスタッフがキャリーさんのもとを訪れた際、「私がここから出たら里久にドレスを作る約束をしたけど、どんなドレスがいいか聞いてきて」と頼まれたそうだ。キャリーさんは答えたくない質問をされて一度は心を閉ざしたかもしれない。しかし、真剣に向き合おうとする里久さんの様子を見て本当の友達と思ってくれたのではないだろうか。現在、里久さんはタガログ語を勉強しながら、KnKスタッフを通じてキャリーさんと手紙のやりとりをしている。

### 清水匠（しみず・きょう）フォトグラファー

自然映画会社でカメラマンを務め、教育映画や自然科学番組の制作に携わる。1999年より「国境なき医師団日本」の映像部でアフリカやアジアの活動現場の撮影・編集を担当。2003年よりNPO「国境なき子どもたち」に所属するかわらフォトグラファーとしても活動している。



「希望の家」に収容された子どもにインタビューをする、日本の中高生。同世代の子どもが語る生活に衝撃を受けていた。